Of Human Bondage 試論

—— IV. ——

脇田　勇

III. Philip Carey の人生遍歴

(1) キングズ・スクールの生活
(2) Heidelberg 時代
(3) Whitstable における Miss Wilkinson との出会い
(4) ロンドンの経理会計士見習
(5) パリの青春
(6) ロンドンの St. Luke's Hospital 時代
——Mildred Rogers からの解放——（本稿）

(6) ロンドンの St. Luke's Hospital 時代
——Mildred Rogers からの解放——

キングズ・スクールの生活，Heidelberg における青春謳歌，ロンドンの経理会計士見習，パリにおける諸々の芸術家との邂逅と人生遍歴を重ねた Philip Carey が最後にたどりついたロンドンの医学生時代は，この長篇の 55 章から最後の 122 章までに語られて行く。Philip の人生の第三の出発ということができる。この間には，旧友である自称詩人の Hayward，画家 Lawson，詩人 Cronshaw などとの再会とか，Mildred との関係に疲れきった時に救世主の如くあらわれた Thorpe Athelny 一家との親交，忽然として訪れた人生への関眼など，色々な事件が包含されているが，本篇では主として Mildred との出会とその束縛からの解放に的をしぼって考えてみる。

この小説に登場する女性については，それぞれモデルの存在したことは前

述の通りである。即ち Miss Wilkinson は叔父の友人で，アルザス生れのフランス人の家庭教師をモデルにしたもので，彼女は一回か二回の休暇を叔父の牧師館で過している。パリ時代に出てくる Fanny Price は，モームが1904年にパリで知り合ったいたましい，才能のない娘をモデルにしている。Mildred のモデルが誰であったかは判然としない。Richard A. Cordell[(1)] によれば，全部が全部モームの創造上の所産ではないということになっている。モームは Philip のように，長い間身をさいなむ恋愛事件を経験したことはなく，Mildred との品のない，屈辱的な恋愛事件のあらゆる拷問にも等しい苦悩は，ただ一つだけは例外として，たいていは虚構であると告白していると述べている。この小説全体がきわめてリアリスティクに描かれていることは読者の誰しもが感じるところであるが，特に後半の，この小説の約半分にあたる部分に詳細に語られる Mildred とのかかわりあいには，むしろ嫌悪感を覚えさせると言ってもよい人間のいわゆる 'bondage' が鮮烈に描写されていて，けだし本小説の白眉と言える。この部分だけが映画化（邦画名「痴人の愛」）されている理由もおのづから理解されよう。

Philip は父の母校 St. Luke's Hospital の付属医学校に入学する。小さな下宿の部屋ですっかり落着いてロンドン生活がはじまる。余り親しい友だちはできなかったが，Dunford という学生が彼に好意をよせ，一緒に music-hall などへ出かけた。彼がさる喫茶店の女給が素晴しいというので行ってみると，ひどく貧血症らしく，薄い唇には血の気がなく，肌は緑色に近く，赤味というものの全然なく魅力のかけらもない女性である。Mildred Rogers という名であった。Dunford から彼女に接近するきっかけを作ってくれと頼まれて話しかけてみると，いかにも愛想気がなく，生意気で，Philip は二度とその店へ行くものかと思う。しっぺがえしをしてやろうと再度出かけてみるが，彼女の素気ない態度には腹が立つばかりである。彼女と一緒にいる時は，その教養のなさ，下品さに憎悪を感じるのであるが，いないとなる

(1) Richard A. Cordell: *Somerset Maugham, A Writer for All Seasons*, p. 94.

とたまらないやるせなさに襲われる。自分が彼女を恋していることを意識するようになる。Philip にとって，Mildred に対する恋情は一種の拷問のようなものであった。恋とは，自分の生血を吸って生きている心臓の中の寄生虫のようなもので，自分を吸いつくして，その外の何物にも興味が持てない。St. James's 公園や美しいテムズ河の流れも，かつてのように彼の心の慰めとはならなかった。National Gallery に行っても一枚の絵に没入することもできず，何よりも楽しみであった読書も無意味な感じしか与えてくれない。彼は囚人同様であり，とらわれの身である故に自由になりたいと念願する。

> ... Love was like a parasite in his heart, nourishing a hateful existence on his life's blood; it absorbed his existence so intensely that he could not take pleasure in nothing else. He had been used to delight in the grace of St. James's Park, and often he sat and looked at the branches of a tree silhouetted against the sky, it was like a Japanese print; and he found a continual magic in the beautiful Thames with its barges and its wharves; the changing sky of London had filled his soul with pleasant fancies. But now beauty meant nothing to him. He was bored and restless when he was not with Mildred. Sometimes he thought he would console his sorrow by looking at pictures, but he walked through the National Gallery like a sightseer; and no picture called up in him a thrill of emotion. He wondered if he could ever care again for all the things he had loved. He had been devoted to reading, but now books were meaningless; and he spent his spare hours in the smoking-room of the hospital, turning over innumerable periodicals. This love was a torment, and he resented bitterly the subjugation in which it held him; he was a prisoner and he longed for freedom.(2)

そうこうしているうちに，彼女から Miller という帰化ドイツ人と結婚することを知らされる。自分の愛する女の結婚の贈物として高価な化粧かばんを買い，それによって彼女を喜ばせると同時に，彼女に対する侮蔑をもこめ

(2) W. S. Maugham: *Of Human Bondage*, Chap. 62, p. 457.

てうら悲しい満足感を味わうのである。

Mildred の結婚の当日，Hayward (Heidelberg 時代に知りあった文学青年）から手紙が来て，ロンドン来訪を知らされる。Philip は彼を迎えて London を案内し，Heidelberg やパリで知り合った人々の噂をしたりして，久方ぶりに芸術や書物について語る相手を得て蘇生の思いがする。そのうち Lawson（パリで知り合った画学生）もパリを引あげてロンドンに来たことを知り，早速彼にあって絵を習った連中の消息をきく。Cronshaw（パリ時代知りあった詩人）は健康を害し，収入もなしに酒におぼれ，半年もすれば死んでしまうであろうと Lawson はいう。君が Cronshaw に人生の意義をたずねたことがあったそうだが，その答だと言ってペルシヤ絨毯の切端をあずかっているという。モームの作品の中ではこのペルシヤ絨毯という言葉には象徴的な意味があり，彼の人生観と密接な関係を持っている。

66章には Philip の女性遍歴の3番目の女性として Norah Nesbit が登場する。Lawson の絵のモデルの少女に附添としてあらわれた彼女は，25才くらいの小柄な女で，不美人ではあるが明るい表情の持主で，Philip はその母性本能にひかれ，彼女との接触に満足感を覚えるようになる。Mildred からうけた心の傷手もいやされ，二人は肉体的にも結ばれて行く。

Lawson は画家として一人前になってきたが，Hayward は，自分は人生の敗北者だと言いながらも相変らず Plato や Amiel について語っている。Philip は彼を怠惰と理想主義を一緒にした男，そして実行力のない弱い人間，だが友人として面白い男と思っている。

そうこうしているうちに Mildred が Philip の下宿を訪ねてきて，Miller に妊娠したことを告げたら捨てられたという。Miller という男は既に結婚していて3人の子まである男だと聞かされて，Philip は卒業まで学資が続くかどうか心もとない状態なのに，彼女に金を与え，あと三ケ月後に迫った出

産まで落着く宿の心配をしてやる。Philip は Norah の方が Mildred よりも自分を幸福にしてくれると信じつつも，自分を捨て他の男に走りその上捨てられた Mildred への恋情からのがれることができない。Mildred は，出産の費用など全部 Philip の出費となるのに，当前の事として考えている女である。そのうちに無事女児を分娩する。Mildred が保養のため行っていた Brighton から帰るや，彼女のため借りた下宿に案内し，友人の Griffiths（医学校の先輩でドン・ファン）を招いて夕食を共にする。music hall へ辻馬車で行く道すがら，Mildred に接近しようとしている現場を見て，「僕からあの女を奪うことだけは勘弁してくれ給え。つまり僕の全人生なんだ。今まで僕はどんなに苦しい目をみてきたことか」と懇願する。彼が「あんな女，僕は何とも思っていない」と念を押すので，Philip は安堵の胸をなでおろす。一方 Mildred は Griffiths を恋してしまって，この気持はどうすることもできない。かねて約束していたパリ行もだめになったと言い出す。Philip はその言葉に激怒して，お前の困った時にはできる限りのことをしてやっているではないか。子供ができるまで，生活費も医者代も出してやった。保養のため Brighton へ行く費用も，子供の養育費も，君の服代も皆僕の金ではないかと詰めよるのであるが，Mildred は，一度だってあなたを好きになったことはない。この服の払いは Griffiths に頼むと言って喧嘩別れとなるが，翌日あらわれて，パリ行について行ってもよいと言う。Philip には勝利感が湧いてくるが，同時に疑惑の念にかられ，詰問する。彼女が Griffiths に対する激しい恋に身もだえしていることがわかり，自分が費用を出すから二人で週末どこかへ行ってこいと言ってしまう。自虐の悪魔にもてあそばれる Philip の姿が如実に描かれて行く。

Oxford での Griffiths との情事をおえて，Mildred がロンドンに帰ってきていると思うと，あれだけひどい目にあいながら，ただ胸も張り裂けるような欲情を感じている Philip は，Hayward なら自分の意気地なさに呆れてしまうであろうとえ考つつも，足は自然に彼女の宿にむくのである。行って見ると，家はもぬけのからで，どこかへ引越したときかされる。Philip

は，今の自分のみじめさから逃れるため，急に思いたって，Blackstable の伯父の所に帰って行く。牧師館において彼は自分の来しかたをふりかえってみる。あの貧血症の薄い唇，細い腰，扁平な胸をした肉体がある日恋の奴隷に変貌する不思議さ－人の心の中には限りなく暗いわからぬ場所がある。Miller といい，Griffiths といい，どこにあの女を走らせるものがあるのかも考えてみる。そして自分の意志の弱さに限りない慙愧の念を覚えるのである。ここにこの小説の Bildungsroman といわれる所以のものがあらわれている。

> ... Now and then he thought of the future with panic, he had been a fool to spend much money on Mildred; but he knew that if it were to come again he would act in the same way. It amused him sometimes to consider that his friends, because he had a face which did not express his feelings very vividly and a rather slow way of moving, looked upon him as strong-minded, deliberate and cool. They thought him reasonable and praised his common sense; but he knew that his placid expression was no more than a mask, assumed unconsciously, which acted like the protective colouring of butterflies; and himself was astonished at the weakness of his will. It seemed to him that he was swayed by every light emotion, as though he were a leaf in the wind, and when passion seized him he was powerless. He had no self-control. He merely seemed to possess it because he was indifferent to many of the things which moved other people.(3)

ロンドンに戻った Philip は，Mildred に去られてみて，はじめて Norah を思い出し，彼女の愛は，やさしい永続きする恋で，官能以上のむしろ母性愛とも言えるもののあることを今更のように感じる。そして Norah を訪問すると Mr. Kingsford という男に紹介される。彼女の話しでは，Harmsworth の雑誌の一つの編集長であり，彼女の原稿をよく採用してくれる人だという。Philip は，一瀉千里に Mildred との経緯を語るのである。所が

(3) Ibid., Chap. 78, pp. 588～589.

Norah から，Kingsford と婚約したと告げられ，見事に神々のなぐさみものになった自分を反省し，その愚かさを自嘲するのである。

Philip が外来の助手として三ヶ月の期限が終ろうとしていた頃，パリに出かけた Lawson から手紙が来ていて，Cronshaw がロンドンの Soho の Hyde Street にいるとのことで，出かけてみると，健康が衰えきっているにもかかわらずアブサンを手離さない彼を発見する。肝硬変がおこっていることは明らかである。君が人生の意義とは何だときいた時，ペルシヤ絨毯が疑問に答えてくれるだろうと言ってあげたはずだが，答はみつかったかときいてくる。Philip がその答を教えてくれと逆に問いかえすが，彼は，自分自身で発見するのでなければ意味はないとつっぱねる。ここは 106 章の人生関眼への伏線になっていることに注意を促したい。

Cronshaw の誌集が Upjohn という批評家の肝入りで出版されるときいて，彼を訪ねて見ると，死人のような顔色になって寝込んでいる。この窮状を見るに忍びず，自分の下宿につれてくる。Dr. Tyrell の診断によると，もはや絶望的ということであった。ある日病院から帰って彼の死を知る。Upjohn とささやかな葬儀をすませる。数週間后，Upjohn の評論が雑誌に発表され，Cronshaw の詩や生活が凝った文体で綴られて，皮肉にもかなりの評判を得たのであった。

外科助手の期間が終り，入院患者担当の医局員となった Philip は，入院患者の Thorpe Athelny という 48 才の男と親しくなる。ジャーナリストとして色々な新聞に広告文を書くのが仕事のようである。11 年も住んでいた Spain の *Don Quixote* や Calderon のロマンチックで，澄明で，情熱的な音楽について語る時，Philip は我を忘れてきき入るのであった。彼との親密の度合が急速に増して行く。退院后，彼の家の食事に招待され，彼の妻や長女 Sally 以下四男五女の家庭の団欒に，今まで味わうことのできなかった親近感を覚えるのである。Athelny からスペインの画家 El Greco の絵の写

真を見せられ，これこそ魂の画家だと感じ，Hayward の持っているような理想主義を現実からの逃避として軽蔑して，人生の赤裸々な現実に触れようと努めてきたが，今目にする El Greco の中には彼の求めてきたリアリズムより何かもっとすばらしいものがあるような気がしてくる。

Philip had cultivated a certain disdain for idealism. He had always had a passion for life, and the idealism he had come across seemed to him for the most part a cowardly shrinking from it. The idealist withdrew himself, because he could not suffer the jostling of the human crowd; he had not the strength to fight and so called the battle vulgar; he was vain, and since his fellows would not take him at his own estimate, consoled himself with despising his fellows. For Philip his type was Hayward, fair, languid, too fat now and rather bald, still cherishing the remains of his good looks and still delicately proposing to do exquisite things in the uncertain future; and at the back of this were whisky and vulgar amours of the street. It was in reaction from what Hayward represented that Philip clamoured for life as it stood; sordidness, vice, deformity, did not offend him; he declared that he wanted man in his nakedness; and he rubbed his hands when an instance came before him of meanness, cruelty, selfishness, or lust: that was the real thing. In Paris he had learned that there was neither ugliness nor beauty, but only truth: the search for beauty was sentimental. Had he not painted an advertisement of *chocolate Menier* in a landscape to escape from the tyranny of prettiness?(4) (下線筆者)

Athelny 一家と知り合って6週間ほど経ったある日曜の夜，Picadilly Circus で Mildred の姿を発見する。街の女となって通行人に秋波を送っていることに驚き，声をかけてみると，はじめは嘘をついていたが，やがて泣きながら窮状を話し出す。子供の養育費も払えないので，今は一緒に暮していること，それに健康もすぐれないことを語る。Philip は彼女を愛していないことを意識するが，彼女の窮状を見るに忍びず，赤ん坊と自分の部屋に

(4) Ibid., Chap. 88, p. 672.

引越して来いと言ってしまう。そして Philip と Mildred の世帯持ちのような同居生活がはじまる。Macalister という株屋を通して買った南ローデシアの金鉱株が当って 30 ポンドが転がりこむと，Mildred に新しい服を買い，自分も足の手術をうけ，そして赤ん坊をつれて Cornwall の漁村に行こうと言い出し，Mildred は新婚旅行にでも出かけるかのようにはしゃぐのであった。

Philip は足の手術で一ケ月入院する。Mildred に邪魔されず読書のできるのが何よりもうれしかった。ある朝 Athelny から手紙がきて，Kent 州のホップ畑へリクリエイションをかね働きに出かけるが一度遊びにこいとさそわれる。Philip は将来計画を立て，医師の資格を取ったら，まず Spain に行って El Greco の本物を見よう，それから船医になってバンコック，上海，日本へ足をのばそうと夢をひろげている。

Mildred は，Philip が心から自分に恋しているのに，自分がひどい仕打をしたかを思って胸をいためる。自分もしたい放題やってきたことだし，もうこの辺で Philip とならー緒になって身を固めてもよいと思う。しかし一向に自分を求めようとしない Philip の謎を解こうと考えめぐらしているうちに，彼女は突然，彼が自分を欲していないことを悟る。そう思うと，屈辱を感じ，腹が立ってくる。Lawson の誕生日のパーティに招ばれて帰ってきた Philip に露骨に迫ってみると「僕はいやだ」と拒絶される。彼女は急に態度を変えて，退屈な男，あぶら虫と罵詈の限りをつくし，とどのつまり 'cripple!'（やい，跛足！）と言ってはならない最后の言葉をはいてしまう。翌日仕事から戻った Philip は Mildred の部屋のあかりが消えているので上ってみて愕然とする。部屋の中は故意にうちこわされた物の残骸である。食器類，家具類のはてから，彼の描いた絵や，Cronshaw のくれた絨毯に至るまで，ナイフと金槌でこわせる物は何一つ残さずこわしてしまってある。Mildred のような女は二度と見たくないと思い，この下宿を引払う決心をする。

Macalister を信じて投資した株が暴落して，文なしになってしまい，

Lawson から借金しなければならない羽目になり，医者の勉強も中断せざるを得なくなって，Athelny の斡旋で彼のつとめる店の案内係の仕事につくことになる。

ある日，病院に行ってみると，Mildred からの手紙がきている。非常に困っているから是非会って欲しいと書いてある。訪ねてみて，もとの商売に戻っていることを直感する。声が嗄れ，おまけに発疹が出て治らないという。診察して病名を告げると彼女は泣き出してしまう。彼女は死の恐怖におののき，自分を一人ぼっちにしないでくれと懇願する。聞けば赤ん坊は死んでしまったという。それから毎日訪問する運びとなる。彼女は日増しに元気を恢復するが，そのうち仕事を探すと言いながら一向にそのそぶりが見えない。ひそかに彼女を観察しているうちに，けばけばしい化粧をして夜の街に歩き出す姿を見てしまう。女の腕をつかんで，無意識に引きずってつれもどそうとして，君のやっていることは刑法上の罪なんだとさとすのだが，彼女はやぶれかぶれの言葉を彼にぶつける。

> "For God's sake come along. Let me take you home. You don't know what you're doing. It's criminal." "What do I care? Let them take their chance. Men haven't been so good to me that I need bother my head about them." ... She pushed him away and walking up to the box-office put down her money. Philip had threepence in his pocket. He could not follow. He turned away and walked slowly down Oxford Street. "I can't do anything more," he said to himself. The was the end. He did not see her again.(5)

長い間の Mildred への愛欲の桎梏からの解放を述べる言葉として全く簡潔そのものの表現であるが，かえって読者の胸にぐさりとつきささるものを感じさせる効果を持っていると言ってまちがいでなかろう。

---

(5) Ibid., Chap. 109, p. 839.

モームは‘the bliss of requited love’[6]（報われた愛情の幸福感）を経験したことはないと言っているが，この作品の Mildred に対する Philip の不幸な恋愛は，冒頭の Cordell の言葉にもかかわらず，著者の経験を小説に移入したことは疑う余地がない。この作品の序文でも，この小説は自伝的小説であると述べていることからも，小説全体の二分の一にも相当する部分が他人の経験で満されているとは考えられない。この‘報われざる愛’というテーマは彼の小説の一つのパタンとなっている。*Of Human Bondage* を貫いている悲劇的愛情は，このあと創られた作品にも類型としてあらわれてくる。*The Moon and Sixpence* (1919) のなかのオランダ人画家 Dirk Stroeve の不幸な恋愛はこの類型の線上にあると言える。Stroeve は丸々と太った面白い男で，きわめて親切な人間であり，誰でも人を愛し，とりわけ妻を愛している。あらゆる機会に Stroeve をからかって喜んでいる，利己的で粗暴で邪悪な男 Strickland に対してさえ愛情を持っている。Stroeve がある時大病にかかると，自宅に連れてきて，昼も夜も看病して友人の危機を救ったが，Strickland は妻の Blanche を奪ってしまう。Blanche は官能的な男性である Strickland の魅力に屈したわけである。彼女はその魅力に抵抗することができずに，夫のもとを去ると言い出す。夫の Stroeve は恐ろしいほど不幸な立場におかれるが，自分を去った後，快適な生活ができなくなることに耐えられなくなって，妻と愛人に自分の家を置いていくと申し出，あまつさえ多額の金を与えて，気が変ったらいつでも迎え入れるとまで言って彼女を安心させる。「私は女が愛してくれるような男ではない。いつでもそのことは知っている。妻が Strickland を恋しても，私には彼女を責めることはできない」とまで Stroeve に言わしている。

この‘報われざる愛’のテーマは *The Painted Veil* (1925) に続いて行く。科学者 Walter Fain は妻の Kitty が全く自分を愛していないことを知りつつも，いつかは自分の愛に報いてくれるだろうと望んでいる。妻がドンファンの Charlie と不貞な間柄であることを知り，彼は自滅的に過度に

(6) W. Somerset Maugham: *The Summing Up*, Chap. 22, p. 77.

働き，自分自身を破壊しようとする。Kitty は情夫が誠意のない男と知りつつ，その性的魅力に抗し得ない。Kitty は病にたおれた夫の臨終の床で，彼に心の平安を与えるため，強く愛しているふりをして，はじめて「かわいい人」，「大事な人」，「いとしい人」と親愛の言葉を連ねて，自分の罪を許してもらうべく嘆願する。Walter が最后に発した言葉は，自分の弱さを告白しているように思われる「死んだのは犬だった」(Goldsmith の‘狂犬に寄せる悲歌’の一節）という言葉であった。

Philip は Mildred に対し，終始低姿勢で，恋にとりつかれた男の弱さを極限まで露呈している。Philip は Mildred より数倍すぐれた女性である Norah Nesbit と別れて，この愚昧な女の世話に身を捧げ，Miller との間にできた赤ん坊の養育費まで出してやるのである。今度こそ結婚できると思っていると友人の Griffiths に奪われ，その上二人で旅に出ると言い出すとその二人の旅費まで出してやるが，女は再び捨てられ，とどのつまり Philip のもとに戻って生活をみてもらうことになる。

女性の内奥に秘められた野性は，この作品のみならず，モームの作品に幾度か繰り返されるテーマで，前述の *The Moon and Sixpence* の Stroeve の妻 Blanche, *Cakes and Ale* の中の Rosie などをあげることができる。モームは常識的な人間観の殻を常に破っているが，女性の場合特にそれが痛烈さを発揮している。それは *The Summing Up* の 15 章にある如く，生れつきの気むずかしさのために性の欲望を十分に満すことができなかった不幸からくる抑圧感からであったかも知れない。

Philip をめぐる女性との交渉をみて行くと，最初に現われるのは Miss Wilkinson で，これは年上の女性に対していだく好奇心のようなものでしかない。パリで知り合った Fanny Price は，彼に対し生涯に一度だけの愛情を持つが，これは全く一方的で，Philip の方では一向に愛情などは感じない。ロンドンでは，小説家の Norah Nesbit が彼を愛するが，Mildred が男に捨てられて戻ってくると，Norah と手を切り逆戻りするぐらいであるから，Norah の母性的愛情にちょっとひかれた程度でしかなかった。Philip

が真剣に愛したのは Mildred 一人だけであったが，それはみじめなばかりの一方的恋愛で，しかもその恋愛は大きな破綻に終ってしまう。最后に彼が結婚の相手として選んだ Sally Athelny という娘は，彼より年は十才も若い娘で，好意は持つが，はげしい情熱などはみじんもない。どうやらこの小説の男女関係は，恋愛の相互関係はなく，常に一方的である。

この小説の題名が示す通り，人間というものは，その人生を支配する感情の絆にしばられている。経験とか分別のある考えとかが，人間の行為を左右し得るという考えは単なる錯覚にすぎない。青年たちは，成長するにつれて，いいようのない苦しみを味わう。それは今まで人生について教えられてきたことが多く偽にすぎないことを知らされるからである。彼らは，Philip と同様，別の幻滅を味わうのである。Philip は，あらゆる人間関係において，人生の事実というものは，今までそれによって育てられてきた偽の理念と全然別のものだと気づく。それらすべてのうちでもっともにがにがしく感じたことは，人間は自分の運命を自由にすることができないという事実を知ったことだった。男というものは，女の真の姿を見ず，思いやりを抱かず，理想化することもなく，恰度 Mildred に対する如く，軽蔑することができる。しかしその女性に対する絆を断ち切ることができず，激しく彼女を欲し，どんな恥を忍んでも彼女を失いたくないと思うものである。これこそまさに‘bondage’で，Spinoza が *Ethica* の第四部「情念論」の中で「人が情念を支配し，制御しえない無力な状態を私は‘bondage’とよぶ。なぜならば，情念の支配下にある人間は，自らの主人ではなく，いわば運命に支配されて，その手中にあり，したがって，しばしば人は，その前に善を見ながらも，しかもなお悪を逐わざるを得なくなる」と述べている絆を断ち切り，魂の自由に到達する過程がこの小説のといかけである。青年時代の悩みは，情念がつくりあげた幻影で，生長するにつれ，その幻の追求に孜々としていたことが解明されてくる。今までの価値体系一切が瓦解して，British Museum の中の無名の基石と無心のペルシヤ絨毯の暗示するニヒリズムの

人生観が啓示される。Mildred との恋愛，よしんばそれは人間の情念のいかに空しいものであるかの例証であろうとも，人生の真実をあばいて行く上で，作者がどうしても徹底的に追究して行かねばならぬものであったろう。かかる意図から，モームが，人間の情念のもついやらしさを，Philip と Mildred とのもつれあいを通して，読者の前に転関して行った点を見逃してはならない。Miller に捨てられた Mildred が，彼のもとに再び戻ってくると，Philip の情念は以前にも増して燃えさかり，軽蔑すら感じていた彼女の完全な擒となってしまう。その情念は必ずしも性的欲望とは言えない。Philip は彼女の肉体を求めようとはしていないのである。

Griffiths との情事によって再び Mildred を失った Philip はロンドンに居たたまれず，Blackstable に帰って，自己省察を重ねる。彼自身の考えた哲学など肝腎の時何の役にも立たず，何か自分にはわからない力に支配されていることを意識させられる。彼の理性などというものは横からの傍観者であり，事実の観察はしていたが，干渉する力は皆無であったのである。

> He considered with some irony the philosophy which he had developed for himself, for it had not been of much use to him in the conjecture he had passed through; and he wondered whether thought really helped a man in any of the critical affairs of life: it seemed to him rather that he was swayed by some power alien to and yet within himself, which urged him like that great wind of Hell which drove Paolo and Francesca ceaselessly on. He thought of what he was going to do and, when the time came to act, he was powerless in the grasp of instincts, emotions, he knew not what. He acted as though he were a machine driven by two forces of his environment and his personality; his reason was someone looking on, observing the facts but powerless to interfere: it was like those gods of Epicurus, who saw the doings of men from their empyrean heights and had no might to alter one smallest particle of what occurred.(7)

(7) *Of Human Bondage*, Chap. 78, p. 589.

彼のもとを去った Mildred が Philip によって Picadilly Circus で発見されるが，売笑婦に身をくずした彼女に対する寛容の気持からか，恐らく自己犠牲への願望からか，彼女と子供を自分の所に引きとるが，この時の Philip は完全に自己抑制ができていて，彼女に対して感ずるものは 'infinite pity' 以外の何物でもない。逆に Mildred は，最後の力をふりしぼり，Philip に愛を迫るのだが，彼の強い拒絶にあって，完全に感情の奴隷と化してしまう。彼女には自分の立場を分析する知的能力がない。Philip は長い間，理性をもって感情を抑えることができなかったが，逐に obsession から自らを解放することが可能になったのである。Mildred は依然として狭い量見にとらわれたままで，悪口雑言の限りを尽くして別れて行く。ここにも人間の 'bondage' の悲劇のあることを感じる。

Robert Lorin Calder は，この小説に，truth, beauty, goodness の三本の柱をたて，前二者は，ロンドンの医学生時代以前の遍歴において述べられ，その最終的解決はこの小説の終りまで継続して行くが，読者の実際の関心は goodness にあって，これは後半のテーマとなっており，その重要部分は，Philip の Mildred に対する懊悩に等しい愛情とそのあとにくる Sally との関係の間のコントラストにあり，Mildred, Griffiths と Athelny 一家との対照の形で，善と悪を表現しようと慎重な試みをしていると言っている。

最后に Philip と Mildred との恋愛についての Calder の言葉を引用してこの稿を了える。

> ... What it (the affair between Philip and Mildred) does represent, however, is a very important and dramatic step in the development of Philip's emotional independence; it is Maugham's treatment of the strength of the emotions and the dangers of their overwhelming one's reason. The agonizing entanglement with Mildred is thus merely another

trial which the hero must undergo before he can achieve true liberty.[8] (下線筆者)

Reference Books

References to Maugham's works are to the Heinemann (London) editions.

Of Human Bondage, Heinemann, London, 1966.

The Summing Up, Heinemann, London, 1966.

The Moon and Sixpence, Heinemann, London, 1966.

Cakes and Ale, Heinemann, London, 1963.

The Painted Veil, Heinemann, London, 1967.

Robert Lorin Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*, Heinemann, London, 1972.

Richard A. Cordell: *Somerset Maugham, A Writer for All Seasons*, Indiana Univ. Press, 1969.

(8) Robert Lorin Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*, p. 107.